

マーガレット・ドラブル試論

—処女作『夏の鳥籠』における女性の生き方—

鈴木 万里

マーガレット・ドラブルは、ミユリエル・スパーク、ドリス・レスリング、アイリス・マードックらと並んで現代の英国における主要な女流作家のひとりであるが、その作品は、実験的な手法や最新の思想を積極的に導入するよりも寧ろ伝統的なリアリズムの流れを汲む教養小説的な特徴を備えているために、問題意識が希薄な印象を免れないかもしれない。また自らを“a private writer”と称しているのと呼応するように、作品中の主人公の多くが女性であり、しかもその年齢と経歴が執筆時の作者とほぼ並行して描かれている点からも、個人的な体験が濃密に作品に反映されていることを容易に推測させる。しかしドラブルの描く、自由を求めて現状を打開することを夢想しつつも現実から逃れられない人間像、或いは親子兄弟姉などの身近な人々との葛藤を通して自己認識を深めていく姿は、多くの現代人が共通に抱えている問題を含んでいる。いわば、ごく日常的な場面を積み重ねて、人間の自己認識という極めて普遍的な主題を扱いつつ、現代のもつ閉鎖的な状況を浮び上がらせているのがドラブルの小説世界である。とりわけ独身女性を主人公とした初期の長編小説—『夏の鳥籠』（1963年）『礪臼』（1965年）『黄金のイエルサレム』（1967年）——はごく限られた個人的な領域に焦点を当てているために、かえって特徴的な心理傾向が顕著に現れている。いずれも1960年代の作品であるが、男性と女性或いは親子兄弟姉妹との関係、故郷と大都市での生活の対比、結婚と仕事の選択、夢と現実の乖離など、現代社会に生きる人間たちのもつ様々な特質と問題を提示している。本稿では、これらの3作のうち、処女作にあたる『夏の鳥籠』に描かれている女性たちの生き方を通して、現在の閉塞的な状況を作り上げている根源的な問題について考察してみることとする。

この作品は、大学という楽園を後にして卒業後真剣に取り組むべき仕事を見出せず、さりとて結婚して家庭におさまってしまう決心もつきかねるといっ

た中途半端な状態にあるセアラ・ベネットが一人称で語る小説である。これは、人生における重要な選択を保留して、自らの生き方を確定することに伴う様々な責任や不愉快な立場を回避しようとするモラトリアムと呼ばれる状況を連想させる。しかしセアラの場合には単に決定を引き延ばす為というよりも、安易な選択によって未知の可能性をもつ存在であることを断念してはならないという半ば強迫的な意識に負うところが大きいようである。彼女は何でも苦労して自分でやり遂げないと安心できない性格として描かれる。

I don't know why I punish myself so, but I always do.

... I can't enjoy myself unless I do everything the hard way.¹⁾

卒業後は暫くパリで英語を教えたりしていたが、この仕事は何にもならないので自分にとって十分に「真面目」でないと考え、姉の結婚式を機にあっさりやめてしまう。

...but it wasn't serious enough for me. It didn't get me anywhere.²⁾

‘serious’ ‘seriousness’はこの小説で頻繁に使われ、主人公の価値基準を示すキイ・ワードとなっている。この真面目さゆえにセアラは自分が何をすべきかを模索し続ける。彼女は大学時代に、人は何でも手に入れることができると考え、あらゆるものを手に入れるつもりであった。

‘Of couse one can have everything,’ I said. ‘Have one’s cake and eat it. I intend to.’³⁾

知性と美貌を兼ね備えた若い女性にとって未来は無限の魅惑的な可能性に満ちているものと映ったに違いない。それらを十分に実現することこそ自らの使命であり、また自分にはその力が備わっているという自負心さえ抱くことができた。ところが大学卒業後は一転して手厳しい幻滅を体験することになる。きちんとした仕事に就く気は無いのかという母親の非難めいた質問に対しても、自分が何をしたいのかわからないことを認めざるを得ない。

... I don't know what I want to do. ⁴⁾

この時のセアラは、自らの生き方に対する世間的常識の側からの批判を痛感し、後ろめたく身の置き所のない思いと同時に、従来とは別の価値観による新しい生き方を探っているのだという自負心からの反発をも感じているはずである。彼女が後に語っているように、したいことはたくさんあるのだがそれはすべてキャリアに繋がらないし、生活の資ともならないのである。

‘Oh, there are hundreds of things I want to *do*,’...‘but you couldn’t call any of them careers. You couldn’t earn a penny from any of them.’⁵⁾

ところがこの「したいこと」とは、ローマに行ったり、恋人と以前のように愛し合ったり、あらゆる場合に相応しい服を持ったり、小説を書いたり…といずれも将来の人生設計に結びつくような具体性を備えたものではないことがわかる。従って、自分には最適の場が無いので決して落ち着くことはないだろうという極めて消極的な見通ししかもち得ない。

‘I never will settle down,’...‘There simply isn’t a niche for me.’⁶⁾

更に、「友人たちは皆、欧米を放浪して何かもっといいことはないかと考えたり、結婚して退屈してしまったり、中学校で教えたりして滅茶苦茶をしている」⁷⁾という言葉から、同世代の人々の生き方がセアラにとって到底容認できるほど十分に「真面目」なものでない、いわばその場凌ぎの中途半端な暮らしと映っていることがわかる。さりとて大学に残って研究を続ける生活など滑稽でしかない。何故なら、男性にとっては学識豊かで同時に魅力的であることも可能だが、女性が魅惑的な学者になれるとは考えられないので、それは根本的な‘seriousness’を欠いていると考える。

‘You can’t be a sexy don. It’s all right for men, being learned and attractive, but for a woman it’s a mistake. It detracts from the essential seriousness of the business’⁸⁾

ここでセアラのこだわる「真面目さ」が独得の価値基準として作用していることがわかる。美貌の若い女性が学問の研究に没頭している姿など滑稽であるが故に極めて不真面目なものと考えられている。彼女の‘seriousness’は恵まれた知性と性的魅力のすべてを十分に活用させるような何かを追求させずにはおかないのだが、かと言って例えば結婚と仕事を如何に両立させるかなどという実際的な問題の解決に向かわせることはないのである。学者になれば天性の美貌を台なしにしてしまうことになるし、また安易に結婚という逃げ道を選べば知性を捨てて今まで反発してきた従来の価値観に身を委ねることになってしまうであろう。このような躊躇^{ためら}い故に彼女は具体的な行動を回避し続ける。

The days are over, thank God, when a woman justifies her existence by marrying.⁹⁾

女性が結婚によって自らの存在証明をする時代は終わったのだと安心するセアラには、本質的な問題の所在が把握できていない。確かに多様な価値観が共存する現代では、従来の固定観念に拘束されることなく各人が自由な生き方を追求する可能性をもつようになった。しかし見方を変えれば、生きることの定型が失われてしまった今日のような時代には、各個人が自らの生きる「型」を作り出さねばならなくなったとも言えよう。自由を追求することを許されると同時に、自分で生き方を考え、自らの生きる道を選択決定しなければならないという、かつてない負担を負わねばならないことをセアラは十分に認識してはいない。自由の代価として、自らの生を独力で個人の責任において創出しなければならない事態に戸惑い、却って自由を持て余し扱いかねているようすらある。ちょうど巻頭にエピグラフとして記された J・ウェブスターの詩の中の小鳥が鳥籠の外で絶望し中に入りたがっているように、セアラもまた捕われた安全な状態に心引かれる折もある。例えば、大学卒業後幸せな結婚をしてまもなく母親となる喜びに顔を輝かせている友人ステファニーを見て泣きたい気持ちになってしまう。

... She would wear pretty maternity dresses and be an excellent mother. It made me want to cry, and I even felt the tears rising,...¹⁰⁾

また友人、ウヴェルの話を聞きながら、他の人は皆素晴らしい前向きの人生を送っているのに、自分ひとりだけが取り残されたように感じざるを得ない。

... I felt as though everyone else was leading a marvellous, progressive life except me, and that I had been subtly left behind. ¹¹⁾

目的に向かって迷うことなく進んでいく人生、或いは平凡な結婚生活に順調に適応する生き方が如何に悔り難い存在感をもつかをセアラは痛感したに違いない。しかし彼女は依然として自らの恵まれた可能性を諦め切れず、かと言って何ら具体的な行動に移る決意もつかないという八方塞がりの状態に甘んじつつ、不安と焦燥と罪悪感と孤独に苛まれ続けているのである。

この小説には、主人公の他にも特徴的な生き方をしている何人かの若い独身女性が登場する。セアラがひとつの典型として高く評価しているのは、大学卒業後各地を放浪しながら全く自由気儘に生きている友人シモーヌである。セアラのように自分に最適の場所を求めて焦燥にかられたり自己嫌悪に陥ったりすることなく、どこにも帰属せずにしかもあらゆる場所に属し、責

任などは無関係に生きていく無軌道さを彼女は愛し讃美さえしている。

‘... And yet she doesn’t belong anywhere. Or perhaps she belongs everywhere. I’d like to be irresponsible like that. To be able to go on like that for ever. ’ ... And I didn’t want to be Simone, or only at times. ¹²⁾

しかし一方で、あらゆる既成観念や自意識や自衛本能を超越してしまった、言わば「女」であることをやめた中性的な存在を自分とは異質のものと感じずにはいられない。シモーヌのように何ものにも拘束されない自由な生き方に憧れつつも、その無秩序さを恐れている自らの極めて常識的で臆病な一面に気づいていら立たしさを覚えるセアラの心理は見逃せない。

シモーヌとは逆の意味で、独身女性の生き方のひとつの典型を示しているのが、三歳年長で教職に就いている従姉のダフネである。不格好で鈍感で人の気持ちを解さないダフネは、誰からも相手にされない醜惡な独身女性の見本として徹底的に戯画化された人物像である。しかしセアラがこの厄介な従姉を軽蔑し無視しつつも内心ひどく恐れているのは、その見苦しい自己満足や常識に囚われた陳腐な思考が、自分の心の奥にも打ち消し難く存在していることに気づいているためではなかろうか。

Daphne is somehow a threat to my existence. Whenever I see her, I feel weighted down to earth. I feel the future narrowing before me like a tunnel, and everyone else is high up and laughing. ¹³⁾

ダフネがセアラの存在にとって脅威であり、従姉を見るたびに地面に引きずり降され、未来がトンネルのように目の前で狭まっていくように感じるのは、ともすればセアラ自身もダフネのように独善的で偏狭な女になりかねないという危険を感じているからに他ならない。勿論セアラは人目をひく容姿と優れた知性に恵まれている自分を従姉とは対照的な存在として際立たせようと懸命なのだが、その執拗さと蔑みには近親憎惡の念を感じざるを得ない。シモーヌとダフネという特徴的な二人の独身女性の生き方を両極として、セアラはちょうど中間に位置づけられるであろう。前者の実体の希薄な無色透明さに感嘆しつつも自分とは相容れぬものを感じ、一方後者の偏狭さを嘲りながら、我身の優柔不断さを恥じるという極めて健全で良識的な一面を窺わせていると言えよう。

大学時代の友人で一時期ロンドンで共同生活を送るジルもまた前述のエキ

セントリックな二人とは別の意味でセアラとは対照的な生き方を選んでい
る。卒業直後に相愛のトニーと結婚したジルの人生は順調そのものに見えた。
ところが画家志望で生活力の無い無軌道な男との結婚生活が破綻するのに一
年とはかからなかった。二人は些細なことで口論を繰り返してはお互いを傷
つけ追いつめていく。

“Put the kettle on,” and I said, “Put it on yourself, I’m reading”;
and he said, “Put it on, what the hell do you think you’re here
for?”... ‘You don’t know’... ‘what a difference it makes not to have
meals provided. To know that if you don’t start peeling potatoes
there won’t be any potatoes...¹⁴⁾

ジルの読書を遮るトニーの「薬罐をかけて来い。何のために自分がここに居
ると思っているんだ。」という横暴な言葉や、学生時代とは違って自分で食事
の仕度をしなければならないことがどんなにたいへんかを訴えるジルの嘆き
—「じゃがいもだって自分で皮をむき始めなければ無いのも同然。」などは、
日常生活とは取るに足りないような細部に支えられてこそ成り立っているの
だという作者の主張を伝える迫力を感じさせる。平凡な日常の場面を具体的
なイメージで鮮明に描写するのはドラブルの特色のひとつに数えられよう。
険悪な雰囲気の中で妊娠、中絶と、最悪の展開を辿って二人は決裂する。
しかしこの破局から浮び上がってくるのは、世間知らずではあるが、^{ひたむ}直向き
で真摯なジルの生き様である。彼女はセアラのように可能性を保留するため
にものごとの選択や決定を回避することなく、自らの感情の趣くままに素直
に行動し、その報いを受けて自らの非を認める。セアラ自身も認めているよ
うに、ジルはずっと寛大で、はっきりしていて、自意識がなく、根本的に異
質な性格なのである。

Also she is basically very unlike me, much more generous and
obvious and unselfconscious. ¹⁵⁾

更に、夫との経緯を説明した後、愛しすぎているので不利な立場だと分析す
る冷静さもあわせもっている。裏切られた後も別れた夫に執着し続け、その
消息を知りたがるジルの姿は痛ましく哀しい。しかし、別の女性と遊び回る
夫を見限ることなく愛し続け、実家で静養する旨のセアラ宛の伝言にも夫か
ら連絡があれば自分の居場所を知らせてあげて欲しいと書き添えるところ
は、他の登場人物には見られない芯の強さ、一徹さを感じさせる。小説の末
尾で二人の復縁の可能性が示唆されているのも頷けよう。¹⁶⁾

いささか古めかしいほど典型的なジルとトニーの結婚破綻劇を挿入することによって、作者は彼らとは対照的なセアラの姿勢を際立たせている。実は彼女にはアメリカに留学中の大学時代の恋人がいることが小説半ばで明らかになる。優秀な成績で卒業後、奨学金を得てハーヴァード大学で研究する機会を与えられた時、迷う恋人のフランシスをセアラは説得して留学を決意させたという経緯が唐突に語られる。しかし今になって考えてみるとそれは単に結婚という問題を引き延ばすためではなかったかとセアラは自分の本心に気づく。

It is only now... that it occurs to me that I may have been simply delaying the problem of marriage.¹⁷⁾

セアラにはジルのように恋愛をすぐ結婚という行動に結びつける勇氣はない。それは彼女がジルほどに深く相手を愛してはいないからではなく、寧ろ真剣であればあるほど疑心暗鬼に陥って慎重になってしまうのである。ジルのように裏切られて自尊心を傷つけられてもなお愛し続ける強靱さをセアラはもちあわせていない。自分を守ることに執着する余り、自らの感情の所在を見失って、自意識にがんじがらめになっている状態から脱け出せなくなっている。エピグラフの、鳥籠から外へ出られないのではないかという恐怖で消耗した小鳥のイメージは、自意識に囚われて身動きのとれないセアラ自身の姿とも重ね合わされる。しかも彼女はひとりであることに完全に充足するほど自立した精神の持ち主ではないことも残念ながら認めざるを得ない。真暗な部屋に帰ってひとりきりになると、女なんて男なしでは無に等しいという愚かしくも痛烈な真実を自嘲ぎみにかみしめるのである。

The thought of my empty bed appalled me. I waved good-bye to them, and unlocked the front door, and thought how sad it was that I had only found it amusing to be a bachelor girl for a week at the most. I hadn't much independence, I thought. And those stupid home truths about a woman being nothing without a man kept running through my head as I groped my way up the unlit stairs.¹⁸⁾

留学中の恋人という実体の乏しい存在は、具体的な行動に踏み出せないセアラによって、格好の砦もしくは逃げ場を提供している。恋人の帰国を待っていると装うことで、将来の見通しも無くその場凌ぎの人生を漫然と送っているという非難をある程度かわすことができよう。それ故一年間の留學生活を

終えてフランシスが帰国の途にある時、セアラの態度は恋人との再会を待ち侘びるというより、自分の心の在り処を確かめたいと考えているのである。

As I sit here, ... Francis is on his way home. He is somewhere in the middle of the Atlantic on his way home to me, and I am waiting to see whether or not I have kept faith. I am waiting to take my life up again, not indeed where I left off, for I shall only find where it is when I try. But somewhere, and somewhere further on, moreover. ¹⁹⁾

恐らく彼女がすぐに結婚を決意することはないであろう。セアラは自ら認める真面目さ故に、完全に納得できない行動を自分に許すことができない性格なのである。

しかし彼女にも時には自己認識を深め、解放された気持ちになる機会が訪れることがある。あるパーティーで男友だちの一人と話している時、セアラは‘high-powered’（活力に満ちている）と指摘され、自らの本質のみならず、これまでの自分と他の人々の関係のあり方すらの確に言い当てられたと感じる。そしてこれこそ自分が心から望む生き方だと悟る。

I was thinking of me as a high-powered girl. For some reason the phrase didn't offend or threaten me, but seemed to say something true, something that connected up with me and how I had been, and moreover connected me with how other people were. It was this last connexion that really mattered: it expressed one quality of living that I would really like to have. I would like to be high-powered, in a way that I wouldn't like to be or to be called Bohemian, or intellectual, or promiscuous, or any of the other charges that I had laid myself open to. ²⁰⁾

そしてどこにも帰属せずに生きているという孤立感から多少救われる。更に、自分の人生に足りないものが何かはわからないにせよ、安定した自身では決して手に入らないものを得ているのだと気づいて自信をもつ。

I don't know what I am missing in my life of permanent and valuable contact, though I feel its absence, but at least from time to time I get something that I would never get were I not so displaced—the sudden confidence, the momentary illumination

of feeling, ships passing and moreover signalling in the dark.²¹⁾

ここでは、単に人生における重大な決定を先送りにすることによって責任から逃れているだけではなく、安定した生活からは決して得られない貴重な何かを求めているのだと自分の生き方を積極的にとらえようとしている。このように、セアラは周囲の人々との接触によって少しずつ自らの本質を見極めて認識を深めていく啓示的瞬間をもつこともあるのだが、それが具体的な人生設計に繋がるような自己改革にまでは至っていない。

しかし彼女が最も深い関わりをもつのは姉ルーズの存在である。この小説は、セアラの自己認識の一過程を辿るのみならず、彼女の視点から眺めたルーズの——結婚に始まりその破綻に至るまでの——生き方を描いたものでもある。二歳年長の姉の姿は、人生において別の選択をしていたなら、こうなっていたかもしれないという「もうひとりの自分」と言えよう。そして姉の生き方に対する反発、羨望、感嘆などの反応がセアラ自身の^{ありよう}有様を照射し、自らを再認識へと導いている。それではこの姉妹の関わりを辿ってみることにしたい。

多くの幼い姉妹たちと同様に、セアラも13才頃までは姉を崇拜し後を追いかけていたのだが、次第に姉に存在を無視されるようになったことに気づき、その後はお互いに強く意識し合いながらも不干渉に徹するようになっていく。子供時代、姉が寄宿学校から帰る日をカレンダーの日付を消しながら待ち侘びて、駅に迎えに行ったにもかかわらず姉に一言も声をかけてもらえなかったという苦い思い出は重要な意味をもつ。最も身近な人間に愛されたい、構って欲しいのに、相手にされないという体験はセアラの自尊心をひどく傷つけたに違いない。自我の発達とともに自らの優越性を誇示しようとする姉の態度によって、相手を出し抜こうとする競争心を植え付けられたセアラは²²⁾、却ってこの姉に勝ろうとする強迫的願望ゆえに、一種の行動停止状態に追い込まれている。彼女は、自らに対して過剰な意識と自己嫌悪とを合わせもっているのと同様に、姉の存在に対しても憧れと反発という両義的な反応を示す。

姉が結婚すると知らされた時のセアラの感想は、卒業後先の見通しも無く過ごしてきた女にとってそれもひとつの解決策であろうという、極めて冷淡なものである。しかし同時に、無為の状態から一步踏み出した姉の決定に多大な関心を抱いており、その結婚生活のあり方に注目している。長すぎる新婚旅行、新居の寝室内のあまりに整然とした鏡台などに不審感を募らせてい

くが、暫くしてルイーズが学生時代以来の恋人ジョンとの関係が続けているという噂を耳にしてようやく納得する。セアラは姉が結婚に至った動機を次のように分析している。

‘... she didn’t know what else to do so she got married... She was far too intelligent to do nothing, and yet too beautiful and sexy to do all the first-class things like politics or law or social sciences—and she was naturally afraid of subsiding into nothingness, I suppose. Or that’s what I guess she felt, from what I myself am feeling. Our situations are very similar.’²³⁾

何もせずにいるには余りに知的すぎ、一流になるには美しすぎるという姉の状況が、自分の現在置かれている立場に極めて似ていることを彼女は認めざるを得ない。自分の人生は他人のより遙かに素晴らしいので他人を犠牲にする権利があると考えているらしい姉に対して羨望をこめた反発を感じながらも、セアラは姉との共通点を見出す。

... I realized what it was that Louise and I really had in common. We were both serious people.²⁴⁾

事情が明らかになるにつれて、彼女は姉が思ったほど自分から遠い存在ではないことに気づき、却ってその大胆な選択を肯定的にとらえるようになる。

Flesh is a straight gift, I concluded: those who have got it had better make the most of this world, because they evidently were created for it and not for the next. I sat there a moment longer, then stood up and looked at myself in the mirror. Myself stared back at myself, caught in a paroxysm of vanity. I hugged my own body in my own arms. My own flesh. Indisputable. Mine.²⁵⁾

恵まれた肉体をもつ者は罪悪感などに囚われずに、人生を最大限に生かすべきであると、姉の生き方を評価しつつ、セアラは自分自身を愛しく感じる。そして、結婚や恋愛を回避してささやかな自由を確保することに執着してきた我身にひき比べ、結婚という伝統を保持しながらも、それを自分に合った型に変えてしまう姉の果敢な生き方を賞讃し、孤立を強調しすぎている自らの消極的な姿勢を反省するに至る。

She was in the tradition, but she had reversed it, instead of opting out completely, as most girls are now obliged to do. I felt a glow

of admiration: she was, after all, striking a blow for civilization in her behaviour, not, as it first had seemed, for anarchy. Why that should be admirable I didn't go into, but I was sure it was: it was braver than to abandon the game completely. To force marriage into a mould of one's own, while still preserving the name of marriage... it seemed an enterprise worth consideration... No doubt I over-emphasize my isolation, ...²⁶⁾

恋人ジョンと一緒にルーズを見ていると、ありとあらゆるものを手にしているように思われて、激しい羨望を覚える。

I envied her bitterly at that moment. It seemed that she had everything and love as well... And I said to myself, Louise always wins. Whatever she does, she wins. And I lose. ²⁷⁾

残念ながら人生において姉の方が遙かに勝っていることをセアラは認めざるを得ないと感じる。帰宅後、彼女が深夜にもかかわらず男友だちの一人を電話で呼び寄せたのも、姉の積極性に刺激された故、或いは今迄の優柔不断さから脱して姉に追いつこうとする意欲の表れに他ならない。ところが、皮肉にもせっかくの楽しい一夜も姉の電話によって妨害されてしまう。事態は意外な方向に展開し、恋人と入浴中に夫が帰宅してルーズは化粧着一枚で家を追い出され、やむなく妹に助けを求めてくることになるのだが、この醜態は姉の生き方をひとつの規範と見なしてきたセアラにとって二重の裏切りと映ったに違いない。しかし、視点を変えればここで彼女は初めて姉の存在の重圧から解放されたのである。プライドを捨てて妹の庇護を求めてきたルーズは、かねがねセアラが興味を抱いていた自らの結婚生活について卒直に語る。もともと結婚を決めたのはお金のため、欲しいものが買えないということがないようにするためであったが、価値観の違う夫との生活は耐え難く、二度と夫のもとに帰る気はないという。かつて大学時代の友人ステラを訪ねて、育児と家事に追われ余裕のない惨めな結婚生活を目の当たりにして以来、決してお金の無い結婚はすまいと決心していたことも打ち明ける。更には裕福な小説家と結婚することで妹に追いつかれるのを阻止しようとしたことさえ認める。すべてを明らかにすることで、この自意識過剰な姉妹はお互いの呪縛から解き放たれ、各々の存在を許し合えるようになる。

しかし、夫のもとを去った後、恋人ジョンと生活を共にしながらも結婚を拒むルーズは、フランシスとの結婚を回避しているセアラと同様の行動パ

ターンをとっていると言えよう。もともと、ルイーズの自己保身のための結婚は、社会的経済的立場の安定と引き換えに、セアラが享受している気儘な自由を断念することであつた。結婚後のルイーズの述懐——かつては見るものすべてが好きだったにもかかわらず、何でも買えるお金を手にすると却ってあらゆるものが贗物に見えて欲しくなくなってしまった²⁹⁾——は興味深い。彼女が望んでいるのは決して手に入らないものであることに気づいていない。社会的経済的に安定した自由、拘束されない結婚生活などは幻想にすぎず、片方を選べばもう一方を断念せざるを得ないのは必定である。しかしルイーズはこの不可能な命題を「真面目に」追求して敗北を喫する。その後は恋人と暮らしながらも結婚を拒否するルイーズは「安定」より「自由」を選択し、結果的にはセアラと同じ状況に再び身を置いたことになる。試行錯誤を経て振出しに戻ったと言えよう。かつてルイーズは妹に「人はすべてを手に入れることはできないのよ。美味しい食物か素晴らしい仲間のどちらかしかな。」³⁰⁾と語ったことがあったが、自らの結婚生活の破綻がそれを裏付けたのである。

この姉妹の生き方を通して共通に見出されるのはある種の「未熟さ」であろう。人は成長に伴って様々な選択を迫られ、その選択の結果、存在の場を確保し責任を引受けねばならない。しかし選択とは必然的に断念を伴う。他のものを切り捨てて自分の進むべき道を決定することによって人は新たな成長の段階へと入っていくのである。ところがセアラは自分が現在もっているものすべてを保留することに懸命である。一方ルイーズは何ひとつ断念することのない選択を試みて失敗する。一見正反対に見える姉妹の行動の根底には共通の願望が機たわっている。彼女らは学生時代にもっていたあらゆる特権を、とりわけ自由と無限の可能性を失いたくないのである。そしてこの成熟を拒否した姉妹は、妥協することなく各々の生き方で自らの存在意義を確かめようとしている。そこには若さゆえの、傲慢さ、真剣さ、痛ましさが見出される。

それでは、人並以上の知性に恵まれた姉妹は何故未成熟なままに留ったのであろうか。Valerie G. Myer はドラブルの小説世界の出発点をピューリタニズムと見て、主人公たちは道徳的なピューリタンの良心と本能的な欲求との葛藤を通じてその和解を目指している、と考えている。³¹⁾ また、Ellen C. Rose は、ドラブルの小説の主題は父権制社会において女であることが如何なることかを描くことであるととらえており、特に『夏の鳥籠』はボーヴォワールの『第二の性』に語られた若い女性の立場を表していると考ええる。

Thus she is in the predicament de Beauvoir finds characteristic of the young girl: "she does not accept the destiny assigned to her by nature and by society; and yet she does not repudiate it completely". She is "divided against herself" (TSS, p. 330) ³²⁾

いずれも説得力のある解釈であるが、それ以上にドラブルの小説世界の原点となっているのは親子（特に母娘）関係の葛藤である。『夏の鳥籠』ではこの母と娘の確執はそれほど強調されてはいない。しかし対話形式で書かれたセアラと母親との長い会話³³⁾は、現代の親子関係に横たわる様々な問題を明らかにしている。教育が男性だけのものであった時代に育った母親は、娘たちが十分な機会を与えられて各々の生き方を実現できることを願って熱心に教育する。一方、人並以上の知性と美貌に恵まれた娘は、学位を取得したにもかかわらずきちんとしたキャリアを求めるでもなく中途半端な生活を続け、しかも家に寄りつこうともしない。かつて娘時代に自分が母をどれほど尊敬していたかを考えると、娘たちのために長い間尽くしてきたにもかかわらず何ら感謝されない自分はまるで召使いのようだと嘆く母親の訴えは切実な響きをもって迫ってくる。しかし他方で、その母の期待と失望を痛切に感じるが故に罪悪感から逃れられず、自らの過剰な意識と現実との乖離ゆえに我身をもて余しているセアラの立場も微妙である。彼女は親の世代がもっていた揺るぎない価値観の堅実さを十分に認識し、自分がまさにその恩恵を受けて現在に至ったことを理解しながらも、自らの生き方をそれに適応させることはできない。旧来の体制を盲目的に受入れるにはあまりに知的すぎ、新しい価値観を創出するには少々常識的すぎると言えよう。確かに女性がその存在を正当化する手段が結婚のみであった時代が終わったことは大きな福音には違いないが、それでは、今後如何にして自らの存在証明をなし得るかという難題に対しては何ら解決策をもたないのが現状である。たとえ旧来の生き方から解放されても、その自由を如何に有意義に使うかを知らなければ徒らに方向を見失うだけであろう。しかも、自らの真面目さと、人並以上の知性と美貌に恵まれているという意識ゆえに、その才を最大限に生かさねばならないという半ば強迫的な思いに囚われている。一方で、より高い生き方の実現を期待する母親に対しては負い目と反発を感じている。例えば久しぶりに帰宅したセアラの心境は複雑である。

I always enjoy arriving home however much I hate it when I get there. ... She always liked me best. I despise myself at times

for giving in to the bargain comfort of meals provided and beds made, but she sees nothing wrong in it all. She doesn't think it's weak to like being looked after, she thinks it's natural. She thinks I'm mad to prefer the dirt and weariness and loneliness that I am prepared to suffer in order to gain a sense of hope. It always takes me a day or two, though, to realize why there is no possibility in my home, ...

Then I got into bed, and as I lay there reading in the clean tight sheets in a spinsterish delight, I wondered why on earth I disliked being at home so much. ³⁴⁾

母が何の疑いもなく供してくれる安楽さに甘んじる自分を軽蔑しつつもその快適さを否定できない。しかし、無意識に娘を管理支配しようとする母親の影響力を鬱陶しく思うセアラにとっては寧ろ佗しい一人暮らしの方が遙かに望ましい。日常生活の安楽さ快適さを犠牲にしてまで彼女が求めているのは 'a sense of hope' (期待感) であるが、それらは具体的な生き方や行動に結実するほど実体のあるものではないので、常に後ろめたさに付纏われざるを得ない。無条件で母を納得させ、しかも母を越えるような新しい生き方を見出す能力が備わっているはずという自負心と、実際には何をすべきか皆目見当がつかない現状との落差—期待と現実とのあまりに大きな乖離が、彼女を家からそして周囲の人間たちから遠ざけて、自意識過剰にしていると言えよう。

興味深いことに、このベネット姉妹の心理的傾向は、ユングが『元型論』の中で、「娘の母親コンプレックス」として分類している型のひとつにかなり類似している。³⁵⁾ これは、「母親の支配に対する防御があらゆる形をとって永続することが人生の最高の目的となっている」一例である。「魅惑するが決して同一化せず」、「何をしたくないかはよくわかっているが、そもそも自分のとるべき道については自分でもよくわかっていない。」という女性像は、母親に支配や干渉されたくはないが、自分の人生についての明確な視野をもたないこの姉妹の姿をそのまま映している。更に、家族、共同体、社会、因襲などへの激しい反発や無関心、セアラの性関係への恐怖、ルイーズの妊娠嫌悪、姉妹の優れた知性(母親の踏み込めない領域を作るための防御)、二人の行動における男性的特徴(ルイーズは恋人を訪れて劇場に出向く。或いはセアラはパーティで会った男性の友人を深夜電話で呼び寄せる、という積極性)は、

いずれもこの母親コンプレックスに顕著な特徴であると考えられる。そして、母親との円満な関係を築くことのできない姉妹は、当然の帰結として自らが母親となることを拒否している。親を裁いてきた世代は、裁かれる親の立場に身を置くことを恐れるのである。

‘I suppose that what I really said to myself was, I will never have children. I want my life, I want it now, I don’t want to give it to the next generation. So I took bloody good care that it shouldn’t happen to me.’³⁶⁾

‘... Think how awful, to have a baby that didn’t like you.’³⁷⁾

更に、セアラが、親との確執を単に個人的な事情であるのみならず、英国中流階級における悲劇的事実としてとらえている点は注目に値しよう。そしてその問題が、「結婚は意味があるのか、人は子供をもつべきかどうか、という実際的なことすべて」³⁸⁾に関わってくると考えている。即ち親子関係の緊張感が原点となって人生のあらゆる価値観に決定的な影響力を及ぼしているのだが、その葛藤による軋轢を越えるだけのヴィジョンをもたないが故に、いつまでも成熟できないのである。親という最も身近な存在との調和的な関係すら維持できない世代は、家族や社会の重圧から逃れて自分自身の内面にのみ関心を示すようになるであろう。ベネット姉妹にしばしば見られる過度の自意識は、母親の支配、干渉への反発の裏返しと考えられる。しかしセアラはこのような自己閉鎖性の終着点を的確に予想しているようである。かつてテレビで見た、自分だけの世界に閉じ籠り周囲の人々を全く認識できない自閉症の子供のことを思い出す場面で、彼女は母と子の関係の最悪の事態と、自意識の行き着く先を見極めたのである。

On the way back I kept thinking of a programme I once saw on television about schizophrenic children: strange, bright little children who lived in a severed world and did not recognize other people as people at all, and climbed over their mothers as though they were part of the furniture. They talked a private language, arranged things in neat lines, made odd little gestures with their hands, and broke their mothers’ hearts, I do not doubt. I remember there was one enchanting small child called Henry, aged three, who acknowledged the existence of nobody except, for one fleeting second, when his mother violently kissed his arm: then

he leaned back and shut his eyes in pleasure, like a child, like a normal living child. The psychiatrist kept insisting that the condition was rare and biochemical, but it seemed oddly metaphysical to me. Which just shows how willing one is to attach glamorous reasons to sickness, provided there is nothing to repel. ³⁹⁾

それでは、セアラは如何にして現状を打開し、精神的に自立した人格となり得るであろうか。この小説ではひとつの細やかな可能性が示唆されているにすぎない。それは、ルイズの恋人ジョンに会いに劇場の楽屋を訪ねた時に紹介された女優ヘスタとその赤ちゃんの姿である。⁴⁰⁾ 騒々しい乱雑な楽屋で穏やかに眠っている美しい子供を見てセアラは深い感銘を受ける。子供をもつのはどんなに恐ろしいことだろうと考えるたびに彼女を思い出すというほどにヘスタの母親像はセアラに鮮明な印象を与えたのである。ところが後に聞くとところによれば、ヘスタも子供ができた時にはキャリアを失うことを恐れて自殺を図ったのだが、幸い発見が早く母子ともに助かったという。(成熟しない世代の典型的な行動パターンである。)つらい試練を経て生き延びた母子の姿は、セアラにとって「母と子」のひとつの規範であり、和解の可能性ともなり得る。ヘスタが紆余曲折を経て子供の存在を受入れたのと同様の体験を通して、セアラは母親との関係を修復できるに違いない。ごく些細な場面ではあるが、ヘスタ親子との出会いは、セアラにとって母子関係を考える上でひとつのエピファニーと言えるであろう。

ドラブルの処女作『夏の鳥籠』は、自意識が自己と周囲の世界との間の越え難い障壁となる現代の人間像を最も鮮明に描き出している。主人公の自己に対する過剰な意識の根底には、母と子の葛藤という普遍的な問題が見出せる。と同時に、価値観が多様化し自由な選択を許される現代に住まう人間にとって、自分自身の生き方を確立することが如何に困難を極めるかを教えてくれる。「したいことがたくさんある。」「何をすべきかわからない。」この一見矛盾したセアラの言葉は、現代人が直面している閉塞的な状況を的確に表わすものと言えよう。我々にはかつてないほど自由な生き方が可能になったように見える。しかしあまりに大きな自由は人間の精神にとってしばしば苛酷であることも否定できない。題名が由来するウェブスターの詩に歌われた鳥籠——中に捕われている小鳥は外に出たがり、外の小鳥は中に入りたがる——は、自己の閉塞的な世界の比喩であるのみならず、今まで人間の生き方

を規定してきた様々な型、例えば、伝統、常識、倫理などをも表わしているのではなかろうか。規範の失われた世界で生きることは決して容易ではない。現代人は、旧来の儀礼や因襲を否定し、それらから解放されることによって自由を獲得してきたのだが、その結果出現した混沌たる世界で如何に生きるかを自らの責任において選択決定しなければならないというかつてない事態に直面し、逡巡しているのである。

注

- 1) Margaret Drabble, *A Summer Bird-cage* (Penguin Books) p. 10.
- 2) *Ibid.*, p. 7.
- 3) *Ibid.*, p. 60.
- 4) *Ibid.*, p. 62.
- 5) *Ibid.*, p. 183.
- 6) *Ibid.*, p. 183.
- 7) *Ibid.*, pp. 183-184.
- 8) *Ibid.*, pp. 183-184.
- 9) *Ibid.*, p. 74.
- 10) *Ibid.*, p. 87.
- 11) *Ibid.*, p. 110.
- 12) *Ibid.*, p. 50.
- 13) *Ibid.*, p. 114.
- 14) *Ibid.*, p. 40.
- 15) *Ibid.*, p. 37.
- 16) *Ibid.*, p. 207.
- 17) *Ibid.*, p. 74.
- 18) *Ibid.*, p. 187.
- 19) *Ibid.*, p. 207.
- 20) *Ibid.*, p. 96.
- 21) *Ibid.*, p. 98.
- 22) *Ibid.*, p. 103.
- 23) *Ibid.*, pp. 148-149.
- 24) *Ibid.*, p. 151.
- 25) *Ibid.*, p. 168.
- 26) *Ibid.*, pp. 180-181.
- 27) *Ibid.*, p. 186.
- 28) *Ibid.*, p. 205.
- 29) *Ibid.*, p. 172.

- 30) *Ibid.*, p. 60.
- 31) Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble : Puritanism and Permissiveness* (Vision Press, 1974) p. 16.
- 32) Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble : Equivocal Figures* (MacMillan Press, 1980) p. 7.
- 33) Margaret Drabble, *op. cit.*, pp. 61-64.
- 34) *Ibid.*, p. 16, p. 18.
- 35) C. G. ユング『元型論—無意識の構造』林道義訳（紀伊国屋書店）p. 141-142.
- 36) Margaret Drabble, *op cit.*, p. 205.
- 37) *Ibid.*, p. 137.
- 38) *Ibid.*, p. 137.
- 39) *Ibid.*, p. 151.
- 40) *Ibid.*, p. 179.